誹諧御傘　五

へ 5
6627
5 止

諷諫にの傘

発凡

名神　非ニ名沢ニ新式如シ而

ふるくあらへハ云日

乃神経吉乃神なくやる

名沢よわく次しく云事なら

云名ろく祭ふ良の京よの在りさ

神ともいはれくの也りのゝ云ん

勅請かしも古名をとなき鳴とき

去日太明神とやおいら名ぶ

まハおし次兵神の住名よるろ

しく云事おく云あくりくましわら

とをせ代なるをとよ記ゑきへ

て名前よろ後ととたちさ

あるも句を発句と云ことなく
とへし俳名をハ上法とそこ
法ると肌と云紙にしと言ふ袖
綺か毛なさ時かおやまりし
歴法とをるらを非二名流と
云義あるへりし次連よへハ二書ね
おもし誹よハ俳乃れし名をと名流
よハきてしを俗まりしさるか於
要なる継しそれも徒こゝの
俳諧とら家ぬしらと云句をの
を名取よきゝし極意なるあり
句体よらすしく名取り
取と云もうらぬと云も落ち
理しらく式目乃ここ
俳の実名をしらよわしす
恙日俳者小野をもしを名流乃

名取とハ誹人も俳の名流名
成取ス名取てあるらぬ次と
定らの穐しおきれおめすな卯
るをるさく人をも山賤と云ふ
山乃字ハあり為く残らん
弟の名よるゝれし山類よさう
をあ風ぅの事成るし
和布 雑と為 和布ハ表こし
めの残みかハ為も
名取とハく 誹よハ二句表
名取の表日小 表乃字日
の字付く
もくゝしゝ寸と新式よ
あまハ一切乃同字別吟を
嫌ふ曲し俳諧日乃ゝ文

字にハ二句去へし
名木の芽ハ植と名草木 かくハ各之
同
只一とをめうきめの為
に一木のめ此外にわ色し
誹にハ人倫め二つとも数よ
りそしも此間をたへしうき
めなとめの内又木の目魚名
のめ山椒のめ髪めなどのつきめ
いろいめ畳のめなどやうの類
数わけ名にも連のやうに名のみ
とれも誹にも用ひらるてなり
ぬるめのも一座によそめもうき
めも人倫上に云目の字ハ植
に一座のいとしあるべしそのほか
ほ人倫ニ在にしても見るめの
字ハ人倫目にハ七句去べく面
に一座かわりと物色なし然
も人倫鳴ののめよそのめハ
八わるに数をなし新式に
のしの指合数もなく見せハ
多く有数ハ只ち見え誹
あるく指まても有るく永く
しそし人をの庭の字通次第
かたらしひ行にハ面しわかの
様ありてもくるしからぬなり
め
に一座ハ面もふ嫌ハ庭し
多めく此のめくの詞行
に一座あり誹に八二庭
めぶめわハ世と云詞のかみ
二句去へり

あしらひなれバ不嫌とあり
にハ面をきらふ嫌あれ但折
ともさらふ嫌ハなき故なり
と有り是よりて何と有りな
ましく誹にハ一座に三あるべし

凡

御　不可為居所新式にしるさ
ざるのミあれバ庭の法
なし昔も御乃池御乃雲な
どと云句あまたし庭のやうに
おもひて次人あるにより
不可為居所とて猶し
山かん御池の御開の御宿の
御を其まゝ用ひられなバと云
詞多くを新式以後の宗匠

庭乃醫詞のやうに心得られ
ども昔人皆用しく新式
有之ぬむきを居所に二句去と
有次ゆへ有時分けてみゆ
云ふの類にも其御と云
文に非居所又庭の語詞に
ありて次連に一あまりし誹にハ
二あるべし居所にも庭に
も嫌ふ庭ひし次御下乃房
をゆく須にも純りと澄御ゆく
字様に侍らハ庭のやうにも
おもひ猶さぬしかれバ庭の
久字と云事又なけれバ新式
にも見へぬ故居も用て猶を
去きらし義を見るに御より
庭に似たる権なれ付べくも

合しつゝ寸文も指合を
句の神魔(やま)なるまじく正文たと
見えさ侍るを座と柳と別
くの柳とおりく侍るし新
式より正当なる所とのきられ
さるゝ座とかりなるかんと云也
なかり座なる人家にあつらうる
物なる人家の柳なれり
柳と云んし候を直段座乃
記字とかやく居所に嫁ふ
事に差不申新式それも新式
小浜りなる義怪なりしへ而も
差総治もすなはり新式をと
わりくへ勅定を是れもしてよ
なれを總文如来さうなるへ誹
そしへ新式を可申用がしと存る

をわ絶可申候ニ而好ニ
湊(みなと) 是一名所にて一誹にては二句に限
り一句と云なれど式目の湊と
い三乃内之外の字に不嫌
名所なかりとのみ是二句ん
是
中なる今 是也候二句まで
誹にては候二名所之又名所字
二字 是一もあり之しく各人
あくしくも有るよくて一座
に三ありて秦(しんまい)候 上 嶺粘
なとる於てのいつも三の内之
玉生忠是なる人名所也
あり是を山類に申しくさ候
山の嶺と云字り入而計を
て嫌し候にする相嶺土之相
甲斐乃緑水連にて有るべく之は

誹にハ面をさしてきらひ侍
上へ置山出るゝ故山かくしに
と號に折を嫌ふ故面を
きらふ歟故連歌にまきらハしく之
誹にハさる紙あふ縁嫌ひ多く制
乃字を不置山乃名あるきにハ
嵐とひとし歟それのミ筈
とろ汁かく嫌ひそめしと
見ゆる故是嫌たる也山
の名ある所にも面を名この
かりめあるにまかハ文字を
畧作り取り句体を含む
ハ付くも随しかく様る格
外様藻恋の様にハを◎と国
し吟るよ様る気をきう
此回うら

三日月　連にハ一座一句なれ
とも誹にハ他の季
にも一句あるまし三日月の句
非ニ者の一九までハ入ハ者の
なる時ハ三日月と計ハ者の
なれハ三日月の名あるを嫌ひと
也又人有り非之秋の句
たり志り様とも鶴阿の次徳
なるしわるとわるを可非ニ者の
三日月に月続付事嫌ニ次
新　一名所に一折に一新式一
座三句の所に出しあり
ともの出代を新とハ只二句まで
定と云言様にも見ん言あり
誹にハ新一名所に一折に一代
亦にひるの新出の新月の

都　雲の都　月宮をいふとわくへし
龍の城とおもふあらハ竜の都　月の都あつかふへし
不可有　南都とあらハ奈良
の都不可有　京都　都鄙
上京　下京　旧都　遷都　新京
平安城　洛陽　洛中　洛外　下洛
東京　西京　此外の都と一つにも
以上字あまりても皆都をよむ句と嫌
九重　九重の城とあれハ　九重ハ不可有　都によむ句と嫌
大宮　禁中　大裏　百敷　雲井
乃庭　大内山　仙洞　院の御所　凡
ものの洞　西院の　都花乃山
何とハ都　九重にて七句去へし
此洞ハ和にも漢と漢より續
その京ハめつらしき事多く
月の都　龍の都とハふるき
都よ物をは嫌ふ　月宮　竜宮
なと歌ようへし別の犯のやう
まきこ嫌ふる付くもくるし
からす旅立の都ひなの都も物
をこらへとも國府ハ中ふると
中せハ都よ付くも不苦やう
の名あるハ非の字も通ぬ事よ
可ならぬこと　京都洛の三字ハ
都字の用られても歌によく
もまよ物をも可嫌之

都ハ　五句嫌と云ふ事成
都も只の都と只の都にて
されとも不受嫌都の時のとて
する句を嫌とおもうハ誹りハ
七句て去る都よ志賀の古京
良のふるき都をもの物をも嫌ふ

あまりて嫌ふハ面をさして嫌ふ也
都の名所ニ不嫌

都鳥 名所なる故都よ面を嫌ひ
とあれど嫌ふハ七句去へ
ことなるゆへ都乃字をやけらぬ
擱るれど嫌ふハ都を離るく也
乃内よても隔して文字ニ付く
都をも嫌ふとりへ 人ハ九重
古ハ都よハ必ずも不嫌ニ是
憲法の寮鹽釜なる故又都鳥
とあるも是よありけ付合よ
発句 木食 奥山上人 辞世よ
聞くせる行しハ人よ指合ありん
奥義を極めて是故ず此
嫌ふるハ只くしくれたりと
見えるありを以て猶も嫌ふ
らぬ此事なる別ならぬ
わる事ゆへ精都鳥の
ある人雑の事の部に絶あり
在家よ去る所也

宮 宮神祇よ二皇居よ二組
此内一ハ名所なるべし
宮ハ大内裏よ一あり嫌よ
中宮后宮 宮女 宮家
宮中 後宮なとく故よ讀哥
と書くと一あまりて嫌ふ也
宮ハ宮 若宮宮 宮ハ宮
あハ皇居と名所也なる
尾上の宮皇居の宮も神
よありめく嫌まりて神祇るわ
皇居神祇混乱多き事嫌
よハ神祇かくも皇居かくも

名所の言二ツ非名所言二
詠入ることと讀宮一ツ也
又句と句尾し去嫌生家
非女言一女言一宮言後行中将
名乃言ハ非名非名所名所言
人倫之皇居の言乃二句去同
ま一句去之家居非名所宮
乃字ま詠二句去しきり也
詠入讀付る付くも不苦又
猿の言ヽ首打こや去と皆二句
其外詠ま宮首付句嫌之
但家詠多しく詠入ままる時ハ
付くも不苦人の名まあや
ちよこや松る多く云ハ言の
門之言之權神祇之宮ま須
蓬なとも云人倫多く八線も云
依句様生數ままあらい次言
又乃同様あり

簑 小笠打越を嫌ふ同云
雨ま簑笠付る不
若云笠ハ日ホも人ま五句ま
もころ敵濡袖ま付くも不
苦簑ま嫌ハ袖ま不付と云
濡袖ホ付くも苦簑ハ濡
袖ま不付と云ハ 杣云綿ら
も簑ハ濡袖ま打越とて嫌
但嫌り袖るのらぬ句まハ付く
もくるしからし次

三字仮名（さんじかな） 同し句ま嫌
ハ七句可去ここ之
字仮名とこ云ホ嫌ふと不嫌
と義別あり不嫌之字仮名

ハ詞衣枕なとやうなるいひ掛る
所にあるゝ文字なり　縁ハ三字
つゞき〳〵つゞきたるへく
く縁に〳〵あつらく
おなじく〳〵となへ〳〵ことにて
ことく縁うん〳〵よきとしく
おもひの外おもはぬなど如此之
字の入て苦しからぬ縁は縁を
始めかたちいふおりよろしからず
うちつけに縁を詞とくむ事を作れば
縁を詞とも縁の字のよへに
詞おしさる縁なり　多くの
詞の中におしなべて詞一つを縁に
はなまよきうるもぬと云本も
云義只一縁を丸くしく
子ども様なる縁は式の三字
仮名といふべき者は古は縁語する
ものなる　おもふにかなはぬ
ものの事には皆何は縁語かな
そのんは本は不宜は三字仮
名といふべくて不宜のなり
縁の字は色々なる　山には色
水には山また稲水なるを
式に歌首〳〵そのなく
草にも〳〵その縁に　雅
らくしるしやうの三字縁
名を云仮名　おもふなる
みなの文字一字の出きれも
いさすらる一もいひはへてまた
ぬ三字とも詞は文字あるく
色ありくしおなしく詞なりみ
くしおりくるもの縁を

云事ならくハあらさる所也し
哥なとゝ云哉も一字なれ共
ほろ方とかの字をへらく三文
字になるれとも中てかく平よ
歌へし歌とも云汁も一字表方
とく云汁も字表なれと哉方
ごうとしとハくへ一字よ定
あるらしやうの歌あとに二字
有ましと古人もさうらちとを代
探すくさうわあるしあと乃
年とのりのう亀し法成詞
ゆくくいあら寸のう亀る初りふ
なりしへ乃うれ初とひしも
云の中う字なれともとく三字よ
有松くゝ作らし表れつ二見て
亀の旬後排まへ姫くもとい

不二通只てまさへの詞乃
そひらく三字仕くくと三字
假名とへ一定通し出づこ乃
うち山う汁けんちと三字
仕くくと三字と称も不足
よ論しの文字ハらへ付くら
文字の絶文句よ右成山き
たけ人またく　君ハ為めくら
やうのハ亀くハ大ゝ綫と仕く
く三字なとハ姫つきも何らき
ものなをきゝらもぬるのらへ
ハ文字まとよ尤付あれとも姫ふ
ましき事こ此准之
三稿三階おの　三文字者
小一ねまし
おかあふまて云へくくハ表面よ

おはと連にいへる誹ハよろ
法乃俳諧は法にて前にはは
乃字なるをもちゆるにもなく
なし字くハ百韻調りこの
たしかなんおもんぎよご
三 花 は云にく云まくめ句
云に字あるめらハ続く同よ
ミるもしも面をも通へなくし

三吉野三熊野 三此文字とも
去るれも法の字よハ二句
去る同云三文字正字まう
そるんそ法の字よ二句隔
や 吉云吉野を皇居る
ろいハ法の字をもちら
熊野ハ信心をあらたむく
法の字をさきもちらるる
まで作るべく

見られ 前ふ七句ある文
句 同云文句の根
きさ三句あるのふいころれを
ある成俳諧三句にせさるべき
若云 余のうあなる俳諧ハ木
ハ三句云ある重なき連と同
しくく文句さる

菊祭 重陽の節句の
祭ハ三月中辰の日
なり

男かしむ 秋も連よ二あれハ
誹よハ三あり男
の字人倫よたり温涼
ひやひやとさう海もしハ整ろ

それもこの換へとも成りに消二首
也

御溝　禁中の玉階の下に流
るゝ清き水の事なるを御溝水と
すなはち溝とし計ハ皇居の
事なりし居所不離溝の字
殊ふかしくききに二溝之
溝なりも居所も玉さへしも
居所之玉風字に和めて潤
なかれしい溝くゆくもの事
白か哉きはしと云ふ事なれは
清溝とへかも御魚流溝一
魚く好むと云ふきさかしたる
魚ならぬ絶句録開してし溝へ
数多に読んでは一まへしそれ
も同じにはい不可併河

為こし　之句水のぬるむ
も春之関云溝ふ清きぬるむ
むと云句は春の夜の若さ春之
その前は水むまでふは雑清き
むもふなる夜之水ぬるむは春之
と溝は清き水の恵なむは春年
の夜深めくにもまし清き水の
春めかむもしかのおもひの涼しき
ゆへの袖ひろく風雅かなく
くらきをくし

流螢小　そくかの付くもしかし
本し次多迎ふる夜
なかなるのもしひめて心こ
もつひ皆同事なし

海苔 あしらひあはれんの事也
あくも有るか
三河之梅 無字よ云御の字不
嫌と云説此伊勢も
二句ゟ又句ゟ二又句よ治定を
見しは是は不嫌と云八朔の一
字を三河之と讀と云是ゟ源の
字を去へくゟ出る梅易し
三河と申詞不ゟ付く吟味す
出る源字正字之酒を一弁文
多く云まいらせ候御酒を
三寸と出ゟ正字之字時春之
八風寒に人を弁と三寸よけく
次と云ゟ名ゟあゟ降ても
源氏苑あ友あまても源乃字
是付ゟ汁嫌ふ庭しうさ
梅と云大裏へ持梅をかせそ
あり居うよ源の字よきうう
もて名ゟ略をほう義りし存候
分組其庭の不通次第よ存
さう分哉りのし

道とく　三句こ

三鴻 播州 豆州 両国ふあり是
よ山数よあし次組播列
乃公名通し豆列も名通よあう

次

汀 二と一の名沼なる

みくら　幣之乃字に不嫌
丸ゟく 幣とて
くらと讀よる细うへしとも

もと清の字に付句を可嫌歟
幣は神の宗廟にかく御しますゆ
祇庭し社壇と同じ事にして清
神のたゝることなしとしては神主
乃みな勝によみからんはひかうと
あり人々ものへしといはさになるか
とるみよる神庭と云事なれ
ともめつらしく清乃字をとり
付るゝ此義をも紀すべしとて 此幣と
見へくらさりと計ものなく清
乃字に不誼とおもへらむ新式によ
銘典に朝と云字付へきもしる
しかしき阿施乃門によるべから
付句又不讒家と去りな思ひく
いかんてとうも清乃字ふいの付句
ときらはしくても次

帝とあらは清の字付べく
みえて も不苦 右法門とも
うけて二句去と云義もあり
無之くは門に面をして嫌ひなし又
当色いたれども帝乃正字ある
ように清門と書いかんなれ去と
で字の読をうらくへ去方又計
なれ根本は大裏乃御門なれ
門の戸乃門に成して次第に
天子をさかくるゆへ字を嫌はれ
ともとりもや天子の清名あり
なりたる故に門戸かんしん
清持くく又は最初の義あり
殊に帝の字を見てゆへ宜し
是は御殿清乃字門かんしん字あり
きすへいかんや流しに橋をせむの

字にあらねども不嫌とも始は
其生発端しく付ける本の
吾るれども揚と云字を正字に
定めたれどもときもなやう
に新式に見えしありされ乃ち
すら法りやうの多くの文持り
は道理かくみかとに門の字
も二句去にしく一座りとあり
様に無法業く法字にし門の
字にても一句不嫌付くとも不
苦の気をときらえてさし合
多く成る持りと承れたること
云名にも法度と云義にて付
あれ行と云ハこれやたらこそり
まに都合の光宮に法乃字
室乃字のみにも不嫌連誹氏

に去嫌ものゝ多きハさ海く
其によるれども大亦乃ち文ハ我
孤にも何底うに不定さるゝにく
待るを身なるになり

みやまの里　勅にも詔にも
去所に法の字
に二句去しさわりも詞にも法
にも皆二句去可成

見こ　神みと云所に一切の法
乃字に不嫌一流あり二
句去と云ミるとにみとら
包初をつくりも連歌俳諧
そうかたなきらひやうり
神みと云ハ神祇にあるふ神
ふみこみ句をし付よりする
見こにそして神乃字をとり

天子の清ふハ神乃字なる
すなハち連よもろハかまれたり
乃清子の句らひをこそも
らゆきみこんるなてろひの
神子乃親をいもらひきうよ
見ことと云ハ清乃字よきをなる
きらしぬとられさくせうあ
まし家覚楽ハこそ猶まじ誹よれ
ハ二文のみこ御も句よ統まハ
きて句くの見ことのかりめ候
字よけく正統にも神社乃
見ことを神子とハ清の字見
ゆるし清の字ハ付るも不吉気
ると上略の詞ハとのなと云義
文字をも一字略しうる抱も
天子乃たるハあろめでくに事哉

るれとも清の字のことさる乃字命下
乃字よとこちらハ読る招き清
乃字よ付句として論ハ見ことしゆ
前句も七句で論るちしくハ否よ
持り

三紀 三寸又洒器と云ことハ洒器
と云ハ清酒器也 下中略
乃字也中略しく書録ハ又洒
盃と云を中略しく云読三寸
と云ハ理り清よきれて清めん
字よハ見ゑき付句をて論すし
三寸ともいハ又馬の字の故ハ
まうらく云計ハ文馬の八来
す紀も三寸 字寸と云ハ時を
酒とハのもくうらく清乃字より
付くも不吉酒の三寸清の

字二句始ふし其言よわるハ
説ク只對句并始ひくて能
なり

御溝水 御乃字二句なり たり

みそき 三ひさく系茨代乃 三坂溜御乃字乃 三字まの浦ある

見されぬ山 視さる山なれし
いろくハ移も絶句よりる也
しとうく

水は 見くさ二つくまつく みころ見し始まて
皆二句を汀を明さる二
句たしみなきつ二句 見え

ニツらなのおとに 宝き 筆文 何 絵
走も絶むほゝかくんへ分く
互ことよわらい肉気蓋二とい
書拘の夏筆の是名るら
文字の車をな説よ筆文
ゑゆく不て対図さことたわ字し
絵ると不害文乃字も悪猿の
文法利衆筆とさわく出接
おいおくゑ曲拘乃むの古文真
寛大 文挽 文学者おの類ハ
不害い法まも懐句様すん

道に よと二句たり山路みと 蔓路 悪路なとの路
乃歩ハ路よい文句挪りい二句
むかしあまさ洗ら也り

路乃小も路小も二句去へし
九折（つゞらをり）と云ハ道なれハ月
歩なるゝ也又畦路 山路なと
路ハ三句去へし
霙（みぞれ）小 霰雨ちと嫌ふ也雪にハ
七句可隔也又句去へし
みぞれに 湯乃字 不嫌
或説ま物を嫌
ゆくへの也 説ありまあらし物
ささる事を嫌ふも雨をも可嫌 付事も
いふ説もありハ雨をも不嫌 此上
為云の文にも学にと
ささやうし小児をとこゝら
こと付るハいふ事 文を
見しわよ云詞の起り名
此道の秘なれ
あらハ是付くも不苦と
云説あと可用也
蛍ハ嫌らく あるく云詞非
迷情迎句神
まるへきし
蛍ハ光りあり あるいハ胡
蝶乃輪かる
なしと云神不似合 蛍ハ大
可云 物ともにわくハ此上
云言ハ除かる嫌よらあら
すも代連歌師の古実り秘
まる事と本食上人乃定
給ふく無悲のお悪わま非
義しハなくて家よ出付さ
まゐとなまよわいしぬ事
あくるのりおもてなと記し

紛らはしき小虫なれども身をも
ひそかにしらやあさましな
波浪に大身をと現されは雁
影にしかれは小身をと現すま
じ蒼みにへとも命に岩根り
も紛らし生死をさだめかぬ
鮮藪には金翅鳥のみどりを
大身も蚊むしまでつきに巣を
くふ有情も紛らし人の目に
ちいさき虫にて身命の二字
を付けらし中無るんや右
歌には非情の草木のむまとめへ
身と後から華紛らはさ後城の
御前にもあらはさるんとれ
く随へくりやうのくさおちゝるも
実を用ゐたるかたしく付

みるに　ありける人わかちことを結ぶ二句
ときのちよまず後を二句纏と
する人性よりその絶橋から後
をも聞しといへは不纏と言葉無しも
にありとり寸をまつ人おもとすぬ
乃み文字折うしく寸ととい
やしよしに付けくといふみしくふあわ
字にも用し義の義ありて二句
まさくて纏に支えよ法し寸さやう
不霧鑒といふ折もなく
もに附にありて二句可纏歌
有付句たとへの句神因意
連なりといふ對酌をも人し総合
しらて不許定

亭主迎ゑ　名の三文字二句さるわ
みかまぎ
御薪　正月十五日百官之さく冬を薪を奉る
忠又あり　萬代よある
みなくち
水口まつり　季も
三冬流れゐ者ハくれ候　とふ台
音羽
己裏よ取る
みさ山まつり　七月廿七日も
ミさ山あり
は時の申しかや流るゝしい
まつりし
水かき草　始き天河よ気ナ
よわり商浪あり

一よハ冬の縁草一よハ冬の総草
と云ハ輪なりとよくらくなる
世の中よくハよ浮ふなる
ともく始とハ花の枝なる
香さ儀なおき浦引くゝハ水
角
裏書　雑にありてさまれハ始と
裏よ於なきくふりし
志
河豚　秋よ一冬よ一物河豚と
しくも月よ始めくく
も冬くまの楽の河豚　川
香の河豚洞の河豚浪冬も
霧乃河豚を始河豚乃家を
冬蛙の鳴の河豚ハ夜連

又ハ一座二句嫌にハ季移りて
面三句去て同季にて同字
義の字付ても不苦嫌にハ
同季に障物二句去也季の数
ハ三句去也
塩しほ 只一燒に一滴一以上と云嫌に
ハ塩竈なとゝ数にひくと
一あるへし但数にハ海を去
燒塩やきしほ 塩雲雀しほひばり 塩魚なとの為
に一以上に定め然しかれとも
塩濱 塩干ひ なとしか只一の内也
塩木 塩釜 塩風なとゝ
たゝふ波なと風なとしかの
内も潮を塩海乃事も連にハ
三句よりちかく一所くあら
なつ嫌にハ潮なとのことく残

ある二句の塩ハ請連一座なとも物を
みゝく二句もさるへし月次塩乃字
四乃外ハ不苦宣衣の名所ことく
ありも物とも兎角迎にもあるへし
割の事るれと塩の字にて二句
て塩義ありたる時ハ塩をもた
ありに詞にハ去へきりなとも
絹物なとて塩文字多くあるめ
耳にも余りとなへきにハ二句
一の二入ありかわとハ文字か
それハ付くも不苦文字なり
しかは同ししのしか有言の
志あれは絹ハ塩乃字
をぬかく翁ある詞これも塩に
面なとて編ても去去塩屋の外
に塩やなとハ人倫物多塩なと

塩ハ非ニ人倫水邊也ともいへし
焼塩 壺塩 塩魚 塩辛 汁菜
乃志ゐめなとハ非ニ乃也 塩かれ
小路 小塩山なとハ塩乃字よ
面をも嫌しも菜の名れ塩屑也
塩ハ数よ續とハへとも味塩よ
哀なりきたよりも付ともなるよ
者しも塩よ面をも嫌ふハ塩口の句を
塩梅なとハ塩口句の内なれハ同
折をも嫌し梅乃めんをもいふとも
塩梅ともよ嫌やう同字 塩
座口乃内し連よも代居所よ二
句とハ人とも桃よハ新式のとく
不嫌居所座の字ハありなる
塩焼 勇汁よ掛るもたとへも
藻塩と火屋と云よ同し

居所乃仏なりし又家の所り
塩屋し家居と云句続なり
も居所なるへ

廉一 かの二一とも一ツ所よハ
ろくと續よ續くと一
如き字ハ廉角雑し廉野字ハ雑
なり又数し居所し但廉の字
ともれを仏句様縁ハも生類
ハもるハ廉字乃内し又就るの
山露乃などやし居所よあり
さなけしの統をも用ひ例このハ
廉野字も佛所なれども家
あらさなる廉以外道
人倫も非人倫 廉も乃馬も
ものなるのも草鍋雑なるも
非ニ生類ハさき廉の哭なし

村も又山類なれとさし柿木を云
ますもあわちの雑之となり
故こそのこ夏なれ数多しく
も夏也かなと付しく雑之趣向
ら古是之千康　菜らひの康
い二も雑也或ハ夫らをらぶん
数或ハいひしらうく如よく
くしろも秋之生類りしを
二句康田の内之猿康　鹿鴻ホ
乃名ホ乃名ハ田乃外之生類よ
もわら次凡云康乃字ありまを
面をこ篇ら霜端康あらく秋之
芸し下崩と汁ハをぬ
下りん
事し野ら東ら室山
ら庭ら毛ホの文字をのくもら
たり棟梅よ二句去也留九下
崩霜和乃下蕗も同前也去く
棟梅ハ二句隔本乃名ありとハ
りしわ棟梅よ三句去のの下
蕗也名所乃夏し世代の従
くのあらし九りいたく新
式よ下蕗と汁前よく棟梅
よ新題を嫌とわらハ野り
宗と不入しくも下蕗よら云
詞書よ成と云よ嫁のちなみを
茅屋らん本屋らん何かん
是ありもあく去よわ低く
生類ら梅乃あるを奥しきく
下崩と云詞あまいりと凡へし
あめの蛍ら宗らよ浪と帰へ
る末世の小鬚の家列かいへも
大地をそれまくさらおるのけまさ

たとへ侍岩のうへ浪磯の色を
隔山岸海川の邊にも下
萌をてらさるゝふるさとに轉じ
原かはるゝ面ハいふされはましきと
云説あるべくわろく思ひ説るれ
と郷にハ新式のとらく下萌
こ汁もまへ文事とお定ぬ
ありけ説歎すべへ私し候

下萌に　下荻　下紅葉　共に組
よしよ山かあらぬかあさる
との文字をもて上へかゝるさ
ふよし云抜にあまたとも
あすくべきものをもくるしかるまじ
ひ下の字ハ侍るべく人々是不
審あるをもとらく自見の末
学あらぬ事しくはる

しくの字　連に於る煙と
あれも郷にハ
面を可け煙けと發句に懐
ても一旋にならしもりとて
てもけ同様なるし　同云まゝ
雅も志りしハ只一句つゞきの次
音云志らしとならわるゝも
志りしならるくもけしく發句に
ならわるく意ある様に一旋に
三文乃内ふ句あるとて心
標野（しめの）下野とうけ志かん
みこゝろすそ衣の標ハさとそ
聲にかなと煙下の字なり
すそ野衣のすそと云句云
なりとすそへ標乃一字
あらぬよの二句まいる

下紐　衣類にしたる乃帯と
和歌にては紐の字
用ひ帯とかくにあるへし
下紐とけしく名乃下紐乃
実にてはなきやうの衣類に
あらさ所ひもとも三句の内
たわ作下紐とけしく下紐の
実花乃下紐にあらく清よ
ふみ三ゆくハなし無ゆくを
下紐ハ秋にハ下比帯を非
秋に細也乃説なり
志ら紐　此の内よ人をまた　事にも志なり
志のふうらんとは　継よハ各そ忘
もれ亀もも二句忘るわ
比翻るよく信よ又証志のふかん
罷ると連ふもあまとて継
よハ句編し名字志のふの浦
しれ不千青るやうの名一所の
姫やうるて連とハ継もうちぶ
まふしき維とも志のふを
つま所と今一首よそれも三
句なふら無名のうても下名
又無事新の志のふたりしき
各所乃信まよハ文字各名
たれてハ無千亀継志のふとち
まて名所乃志のふ乃里より
此る緒なふら無事城設よ
もわふあれとも同所よ余
無名志のふと云詞よ未く
うかまて一首何心なむ又名所

乃信ま一八栖をとらし志のふ
ん一八栖よ懐悪もりん山も佛
法乃悪辱の哀をききるうと
と云數之又一八暮方絃志くふ
をも志のふくとも云たれ気ホかれ
かわめ絃らく吟味しく捨
合をとハ一法通らのも
志のふ乃やま寸差し哉
あらく云ても同前山數よ二句
意味の志のふると信まよとり
言すり志の旅をとるくゑあ志
の旅乃郡るとく云句りき
悪筆悪黙於乃志のふかまさ
なくも不書志のふもわるき大
悪黙よ商をとを通し

志乃曲揚　奥列信ま部
絹るれし捶栖よわく次絃
古来のをされし後よも悪筆
ともかよわみくるかく悪の
ゑあとへよよめりひさ敢よ志の
嫁揚をとを悪筆よ於をと通かさ
連よあまをも琲よハ面をと可
通まりあうく於をと無こ於文
よ志のふもわの數悔るりと
いう絃曲らく寸於或よも
悪筆悔之こそ何ま志のふ
をわとへるし悪筆悪の字
不面通

無常の字　無常は二句二句也　里連に限り嫌
ふれは無常尽の衣装無常なとく
数多く続く一座に五句一座也
名所の事　無常にあり　さらの流不用無常
乃字に入る句は続て嫌句続也
しるし文字　五句の仕二句去
なるてあらしみゆるむ哉
しかし二句むすふとハ見えす
さとし木の数に五句のし
ともいふしと八続くも不
苦
しる海り　清濁かゆく
も二句去なり

句の縁にわ合くも付句
縁之句に入ても嫌はらし流
わかしるくとむとなる
しよも用ゆしえくも小ころ
車にし海わに成てもある五の
しと向ふしと夏のゆくまれ
其趣残縁也
名乃ゆめ小　朔と殆二句去也
前新式にも定かに縁を式　又此時分には不縁
純残連歌用名のゆめ有り又
此時ハ縁は新式としも深く
構く事と後もの気を合遣
乃心は不新道理を用入
ぬ哉といふもえくらへすら
ぬ

志乃ゝめ小　同の字一句又
さく良東付志
乃とハ面をよ一二嫌志のまく
志のゝ字ハ植物ふ字のとれハ句をきら
不審志のゝめとハ鳴く二候名
なれ共ふ之鶏明ふよおもふ付
故ふ鶏且よ打越を嫌ふ也
獣をらひも久明ふよ不嫌
いそれ無く

知よ　志房べし二句去之
しはの字ふる字去之
志るへしるしの無字ハ連よ
了履一句の植なれ共嫌
よハ二句隔てあるへし

志ら小　いふ志るし之珠し
別し給ふ候ふらしき

忠乃志るし　是も色木の絹
志ろ小二句去也

志るしれや　ト三絹共ニ物ほ
二句去乃取り
おせりも陽も色ハ知の字
そこ句去へし

植乃志るしふ　それハ志る
しるしとて
句字別なれ共三字仮名
よきハ次

志さし海乃道ふ　前連よ物なら
嫌よハ両之乃字そえて
不嫌志れし海と升八日本
乃名なら渇三乃名之経道
といふ事しきの国也

あらそ三の内也

志らが髪 述懐也若無題ニ白髪又ハ髪の
名のなき句なとあらハ句
の意ニよりて述懐か
なりとも次第ニ白きハ常
乃述懐ニ近く連哥
面を嫌ひあまりて俳諧ハ
七句可去

志らまゆ 名ハ嫌ふ物ニ二句
風体ニ三句たり
色を嫌ふこと同しやうに
器ハ雪も面を嫌ハ湿し
志滝さえに時分ニ風の名ハ
ら洩らし雪のなふなきハゆ
みふる物也くもと云も雪ニきこゆ
とえらハ雪も降物也時分
と雪ニらせて三句もみられ
る雪と面ニ二句まし隔を
いふてまつたも滝なとハ時分ニ
折を可嫌雪ニハ不嫌時嫌雪
し滝也しかもあしこ三句より
嫌ひもしくハ雪などへし

志がく人 秋乃名もなき逸ニある
を松乃字あれハ秋
名も一季汀ニある也

鴫 無言抄ニ鴫ハもゝ鴫
八十鴫なとゝもいふもある
鳥ハ千けふ文云彼ハ
鴫ハ一羽ニ一句乃物の様
百羽かき文云抄の器

乃下よ鷹一名あふよ一とわ撥
里志て哉え饗よへ鷹二ツ爪ふ
ふ一以と云句の稱とわ定るゝ
ゑへし稱山數水辺よきくゝ
姫鷹ときうちえめ又鷹ありた
とへえ川鷹池乃中鷹あらう
のちいさき又鷹を水辺よ汁
よきうひく山數よ浮く寸
渡鳥（わたりしま）鷹えそる鷹琉球の
鷹ふの國の名をたかくも
山數水辺よあしす又國乃
名よあらさ稱とも浮鷹ら
原蓬の鷹室の鷹山數あ也
よあく次田襄（たこの）乃鷹を水辺
汁ふく山數よあしす浮鷹
見ハうきし海ら東よいかし次
是うきさる鷹く　松鷹　小鷹の
數きあ山るうよしわく山
數あ也海月よきうく姫鷹さ
云汁も山數あ辺るうし茶
へ書志海拙鷹りあん志さ鷹
のくら志海乃ふ袖あとへ山
數ふも水辺ふもあとす云鷹
海辺よあわ様列乃ゝあ也八
くうふく山數ふもあしす

継尾（つきお）の鷹しるき
因事ぇ表ふ然うら

白尾鷹（しろをのたか）

表鷹男ま彦ゝふ時改收竜さ
おえを鷹のきまもしすと云
白羽ふく継（つき）久へ鳥ら事あり
云心を鷹の心よ在の日う尾
の白さを残るもとうんく深山

へいほうんなりし志めんかきの
儚なり

志賀の山越　昔は志賀今は悲しき花と結び
つくは悲離

芍薬　夏之部 芍薬種乃名は
いろいろ離し花とつく
くも葉指のいよりしきか
多種ありし花の名に成り
多いたゞさえを世にはやや
まりし始りし草 此日草とも云
とく牡丹に混乱せり此乃書
にも管見 未知 稗家性名が
万安方 本艸之中に出して薬
と終りし芍薬とて一切を
へいさとは薬と又あるべし

牡丹にハ芍薬対くくに管
他木の草に始りし草の木乃和
名ともに芍薬とものそと世と
りいの白おれたし花木の和名
に芍薬と付しハ津編が
来く気絵付まして用指を
角は又之称あえて婦しく云まし
とハ本草綱欲家積の説草
変的を和名に云ひをと草に
とらとの悪りし文説よ芍薬
をせ花の草にと云ハ咲しよわ
ちりたるまくくおりしたよ
花のりしみくくなる角とよを
つまびらかにわらとハ可憫旅
本書にハまくこ志らく次趣別
摘木の花も三七日まで物と

やせハ若菜よ紛らはしく天
日若やしと云義にいへれとし
云ふ若よし よめる説有
見所もんりとハ雑二縁用一
清水 雑之縁ふとして冬夜
しなれそても夏なり
只春と汲ぬる雑之只春なれ
詩つも汲と同事にかく
雑之清水、詩ふ字にては
しなし二句嫌清水とある
両よ清水さ水嫌之物を嫌
是いへる雖、のハ両と嫌之清
水ハきうかしと云字附句
汁嫌之ちかくよ名所の
清水なるハ三句去とききまは
どのはても三句清水なるま
きらよと云一字も三句
せいもいちききよ春山数之
春也よハかく次

柴戸（しばのと） 柴屋 柴の庵 柴垣何れも非植物
扉前之無別 柴薪 植物よ
あらさ神泉ハ山人あり弟し
く新よ柴戸と云るよ
まろくと家よ去る次柴
の庵 柴の戸 柴垣 柴橋
春 柴薪 数る之く 柴ら柴
たきふ 柴焼なと云 柴木を
又あるへし 薪よ去へし
せぬものゝめあるを連よ
うつゝら柴二句あまへ泄
よハ句体をふくて三句去也

たとへハ多葉の一枝なくし
棟梁よたとへ葉あらそれを
葉よりもたれ雑木の大本に
あらさる残る山葉あら葉
下葉その小枝なくして句を
皆棟梁取合し

むかしわ　道の志る人ハ草木
乃枝をとおりけく
玉申之非ニ棟梁ニ乃と山路
我よの路之字ありて句法之
わりく道よりくぬ法あれ
乃なうくるくも不若路も
又用し法路なくまへ多も
不管

述懐又發之詞為一句之

時志て付ケ紙ニ事ヲ之
哉新式の作も此法やうハ
是ニハ昔古今より述懐の
詞なれとも加しゆるし
かく守く三句ハ其人さなり
計法よく述懐ハよれ不法と
云事也經うち世よりおく
そのさんの有まの色なく之云
句ハ述懐ハもくて發あまり
いひ小新式ニよりわくても縁
句様もし一概ニよしく不定法
述懐とく三句之

雪下志てくる里　新式ニ山の
滴雨乃雪下

非ニ俳諧ニと与るて是迄思ひ

宗匠ゟ極り嫌乃数と不
入一句あらそふなりとも又
星并宗匠山ハ不及申
なき事抔の輪廻の類にハ
案し不尽なるの用多く人
有し古人申し候意を失ふハ
残ましき事ゟ猶又案し其下滴
連誹にも類を一篇毎下に宜
乃名をも異物并ニ連誹にハ面
など尋ねの其下物乃其下際
梅にもある次

宿
一座二句の梅にもなく出
されあるも宿不嫌ら
なり又出山上出乃旅宿等
にも同前旅宿池田乃宿鏡
乃宿など同前宿定人倫之

まて人出かすもれた句にもよりて
述懐に又町方にハ年たけある
折にも町の宿をとくする
述懐にもなりて次居所にもよりて次
旅も同宿しくもと云句ハ非二
人倫居所非之寺方乃同
宿人倫之又旅之居所にて不
嫌宿坊 非二居所二 非二人倫二
又旅にて宿合旅の居之
非二居所二 宿業 居所にも次
宿二又旅一宿屋一 居所にも
又旅にもあらし次宿世同前
辰宿 又八宿を曜師 人倫
老木ハ星の帰ろにも非二居所
不一何まと折りをも嫌ふ一
座に二句なり

しくれ哉　連よわきて一
誹よハ落をそへくる又三字
何里あり
時雨とく　竹越を下略
ましえなくれと曙の頃し
朝時雨とく　朝時雨夕時雨
又句を誹よハ三句とき
霰　冬をきゆると見るも
冬の余の歳抱ヘ二句
とも
神祇とく釈教とく
皆三句とき
志のとしく　志のとく
落句

志のきてと　志のくも句を嫌
去嫌ふ物に武角ふ八月なる次
はるされて志のなはよ一つ
志のとらくゝ又物よ一流
ゆと八あらさ見なくるめり志る
雑も誹よハ前を雲くと数よ
よりてわからはゆと九三句と
さわらく志のなとくるるを
志の志くまくる時といふとて
句をとへ志ゐとく是句と云
七句可山志とゆくとくも同
をゆへなく白糸誓世ある
教句なとくある時そやと
讀よりて志のをかもなる
おもひも不答誓日よなる
乃日乃影　白乃字九ある

あへ弘乃眉白毫ハ九乃
図と書也白ふ弓の人
無名を表とすまゝも志ら
ぬもやしと云時のことく乃字
おもふ句をもて九の字也

鴫

鴫津発句と人名にも
又鴫も鴫之の如き
とおくらく山類の辺りにも
あらし又云鴫の字ふた
簡に書之又鴫田雅治なとも
人名とも又鴫田と云ふ字
て称ひられし名ある又原に
乃鴫よめる鴫の肉と鴫羽
も唐日本の外乃鴫国より
和名なれ今家に識とある
鴫の字也鴫津鳥も鳥
乃名とも称ふれある鴫やえ
まいられし水鳥をもの也れさる
小山鴫之の肉し

樒 しきみ　きり樒を摘
なくてなし

樒梅も雑とあるさかしも
同名の俗燒ともされ非樒梅
樒と草ハ非人家を読もの
まてく只歌発も知る也し
むかさりす別乃前よりし
おもても人なく木の名よおもす
又云樒の葉なとも云句ハ名不
なれも天発となる人にかもす
あるきの也とも云句ハ雑なり
正也よみてす只又発する人
一

椎しゐ　紅葉せぬ木なれバ花ハ
花実抔ある名をとりくわへ
り木なれバ椎と計も嫌し
し実も葉も柴も嫌ふ
しゐしば　柴の嫌ハ雑の山の内
まても不とらく　しゐハ
只ありくせし草木の紙初入
しゐハ雑実類なし　しゐけハ
用お(?)なしにせしを季の新
若し古連歌にしゐけとしく
りしてり句もなく紛ゆり
もひらいまにあるべく次木草
のしゐけに不ることなし文字と
てよせハの始りとあるべし
乃四よにまりくを類をせ
椎ハさしあるべく次

蔵おもかんとりとも云ハなり
荒藪とも云よ同し野山あり
てもかさね嫌ひ網し離なり
椎柏よ二句とハ分るとハ汁も
まとかしもへ分よなりた同
去又志まりいまくらへいたれ
を野山草木の文字まで
へ隔とも志まりし汁し也
しゐの古人も連歌あるから
も椎柏よ二句とハ当世庭
家のしゐまるしく云ハ皆よ
なるへくし寸俳二椎柏ハ只殺業
罰の心ゆらしく云葉のしゐけ
ましもとおもらし皆よ成べく
椎柏よ二句へ経あらしいこし
あぐへ皆よ不嫌をかきる

綱の字毛にあらハ綱の字
りしあまりて毛にたらさる
なやうの事を一字のたすけ
に候か
しけさ又野山なとに　二句　植梅
梅を絶多しけさ又野なと
いふて植梅によそへて次
くつしきなとの数　百韻
一句と言ハと新式の非にも　まゝ
其代より其代の字誹歌と見へたり
なやうの句なる字を一座一句
乃梅とせて誹諧もかくらは
なしとあるたくしく物数
新式の抄に百韻と有数
表　数度遠見を数座
数なやうの綱の情く心ハこの
されは溜下ふしくふ程に
古き座うけ引付くる字
去かしくて絶ちくして見とも
あらん去くをのも新しきのく
玄綱ち如の字をうけても今の
心なりしあるち数の字ハ余所に
も句によりくわらきの字
まへく数の字はハ二句去
如乃字のしくハ也さ嫌られ
それをるく一座に二句なら
連に一座に一句あるへしと
ゆへらハ此如の字乃嫌ハて
也く数の字ハ字ハ去かし
てなく候侍へし

慈しきよもじ　をとの
句題に唐の文に拠るは嫌の
字よりあらず出しするは新しき
とも申し候しかるは出しに云
申しの字の分のとも分けしを
西字みよあり次第てよとへから
入るよろしまかれとのあり雅
きとく云は數乃字と人なとまり
ゆ雑く蒸よは雑なとしきく
詩申しは起りから詞とく
くわ分ある人しるへのく
しくみとりは云文字とてよ
東六の字にしなまはしきとれ
て長二句しるのくしきから
くしきとりしきにか

きりれしなよ縁しなよ代
くしなよるけりしなよは海
くしきよわこりしなよう
朝山しなよさはしさる皆
てよとへし

志はく　如此乃云葉大致百
韻よ二計あるへし
郷よ其三あり

志はすに　二あるへし皆
時と数字にのこ
てと一ありしはすしはつく
よ西を嫌く

しほ海　独りそぬまし

しはかさ〇　正月朔日の夜
夜時の夜と云

なり

鴫 難ならぬ物ゟ珍しきの心
あらくいひくも難し

誹諧古傘

毛

絵ふかく草箋 徹其角 二其六 雲

は新式乃外に絵よりまう
革まるを雑物よいるまじく
画をもおもひいふ草や
書をいふさも雑物よりも
二句去為ともいふ人あれ
また百人の縁をさるへ何ある
雅らく雑物りせさるに
よ紀道理なくおぼえての
し範書絵あらくも長紀葉
乃絵なとしても雑乃書かへ

なを純淮之

清つ村（りんのき） 右未つことを書てし
おの字かいるきす

官ちしれなん備よ

あしす

恵比須（ゑびす） 西宮の神乃御（にしのみやの）
事にて神祇なれと

神祇なりとも人とし面八句

乃内まもし除しかし八秋

釈教乃多八きせ八名字（しやくけう）みれ

もうくいもゝ除しゝ花

恵乃木 難し恵乃実ハ雑とし
とへくりやうの木

乃こハ遠様なり

法

氷室（ひむろ） なにとも氷室にして一座

一句にとむるとも云ふく

にてひようと数くよ讀うし

も雪にとも七句去るへし

うそとしひる〻ハ水のはは

ひくし帰ならす〻ハ定れと

面は也麁くさし句補なせ入

ねをりへく一唯二句まてせ

越のおか室も四月朔日

よりかた月まてまくく献する

稲なり種も六月一日と行爵

と有敷るの夜乃事なゝ

和室（こむろ）済美しのたあし

あゝ和室と和ちよる〻

元日ふあ除事もひこ乃

乃雪も去し

檜扇（ひあふぎ）　多く一誹諧にしるを
は外にハ杦とらへ檜（ひ）の
木檜物師（ひものし）檜皮（ひはだ）なと云檜垣（ひがき）
なとゝ今一あるへし其檜
あるゝ折ハいつくも二の
同類を檜乃く庭川を
若不にある檜乃字と二
乃外嫌也

日ぐらし　蜩も一座一句の
物にて文字も嫌
に虫乃あるも蟬のまゝかり
なれとも蜩と蟬と同類
なれ禮も蟬とハ違ひなく
誹諧にも折なと嫌ひし日
ぐらしと書文とて一句
二句も得まへて郷にハ
蟪蛄と蝉又まつゝのくらもとに
句にはならし皆枯とよふへし

ひさご　瓢（へう）秋之瓢乃為よるへかるへす
一座一句乃植物なれとも誹諧
にハ二句あり打名字よりこミ
一座一句の植物にて二句まて
句数乃字にても同前かまゝ
物より田を瓢（むす）のぐハ植物よ
二句とあり瓢もたる所こと
うつらく瓢乃田あるうちハ
ひさごといふはかゝへかけまし

姫（ひめ）　連歌に二誹諧にハ姫松
姫瓜なとの人倫にあら
ぬ姫今一あり但し姫さ
ま姫君姫ハ人倫ゆへ
あるいは人倫乃所作

もきゆしくたるに船旅
とも一首に三句ものを入るく
きへきなし

ひとつ　さる歌に一月独なとに
一瓢猿にはひさかたり
獨歩の獨吟孤猿に猿ゝ獨に
獨猿部なし歌によろしく
今ひとつへし吟一首乃葉乃名
乃獨活獨鈷の獨鈷回忌
なくひとつとはいふ詞に付て
もくはしらしん獨吟獨歩
あらく歌のよむ獨乃字の上
字なき人へし独かひとつとも
人偏に一文字はひとり二句
なし一文字獨の字歌の上
はふきの付くもくろしう

歌をのせつよひとつへきなき
のひとつにひとつならずの旅
は二句なとも獨もよく歌
はたるに一首に獨を一月ひとつ
松ひとりなとは人偏にあるん
獨は一人ともいはるいふへき獨を獨に
獨宴乃用もなさるは二人之
まうはに人偏用不偏月獨
獨ひとつならすとは二人二句
なしのなく歌に読よへきかは
人偏とも

一文字はひとつへきなきを二句
なとのしもいふひとつ人
なとつゆ人偏なり二句
まも二句とあり読みにいわ
に第に乃字なくてもよも一首

ときうち読よくれて一文字
に三句壇ふきとさる引編よ
ものを句も其同字なされかりわ
かれも二句可嫌之

火

四句乃掲を挑まれハ数よ
讓句も殺家のく又句乃
掲く後面をを嫌へし当火流
火ハ五句乃あひもし実乃火よ
七句去も燈ハ移家よ一座
三句乃所よあよあると定
之換に火字用よ有まもさ
あれも燈も挑よハ五乃火と
灯と云七句去る可割る家
多しやふ句を嫌乃事とふ
ら御ふあれし火と切て同意
なれも火立乃門ある日四の
慈悲なとくらしたる火ハ
火乃字嫌乃字ニハ二句去
之光といふ字句様よんく
火乃字日乃字ハ付句嫌之
それも光と云ハよ数時ハ
不嫌之又火ともかくもなく
て煙燄焔火ニ燭蝋燭
灯燭爐松薪油床かきなく
庭く寺乃海まて入るくゆら
冬する三十日ハ云うくさき
おふるハ家湯をふりて摘をさ
煮火縄の火乃鳴ハ火乃字燈
乃字ニハ嫌二句去之を總季
蛍火狐火等しの中之火
まあらさ除まへ付くまでも
家りし乃多く火ハ新と云

ても形不通なる秋ニとも式
ふるき一巻（ひつ）に火よ秋乃人しも成
抽し出たるかはくひかれとも
なかくとも人にも秋ふコのおもしろと
あしらひまじなる浅ゝ会ニし秋
よいかへ也乃下にかしても火乃秋かん
ゆかしくしても秋ふかおもしろ
と載（のせ）なかりたるしの一かよ書あ
のへしれあまた句んの人かんあや
まわりくなく火乃秋乃ゆか
とまれを秋ふよおもしろかや
あら泳うへ火の事しも浦へ下られ
なかく火乃なりし佳境（えきょう）もあり饒（たく）
火となるなりし着（ぢん）一ある乃なかく火
も秋なりし火ハ秋ふか秋のなりし
なくハ秋ふけりおもしろ雲

火琉火なるハ秋なかにより
火焼よ七句あるり（さうじ）（ごう）野を
あやふし焼（こうこう）蟹（きき）よ焼（とうし）んとふ
むつかしく秋ふにおもしろ雲
焼乃もふおもしろ杉をへ端へなと
漢（かひ）勝焼桃焼乃なり海なな
とれあるきこそなるれも火乃字
なきもろくとへとこ正字く秘
なる井の桃なるれとも火乃字さ
ふ付くも昔しれとこへ字
なかしや焼ん秋桃なるやうる
まつも二句まわしよふ桃る
ここれ句体よし桃ぞこさし

月

桃なれ日ふ月星二句ろう
いなる月ふよれまでうもれ
日とく字ある日次乃日と

中ハ表の日夜乃日秋先日
冬日永日近日ありさき日
さむき日くれの日ゝ数日を
えて梅よき日あつき日月
日こ月子日桃源りの西丸日
宮乃日乃數縁日神か吉水
急日為日冬こ日和やの日
仏乃日ひ鳥の日経をし月星
みちハ二句去し鈴日冬日
鈴附日又附かるかハ入日日の
くゝ綿く日及早らくりて日
も日の気日乃さす日のひら
まうる日て御日こてりも
て御日の春しくハ天の扇
清まをし紅長天の御し長像
ゝ不吉乃詞るれてむさくん

きぬ事しも御く日さかりも
日も宗なる御日もやうよ口きと
月よ象気をこ御句伏日里
乃日ハ日次月次乃日にかくり
き御し月星ホの天像り
三句去し池逃あれ事上も二句
るり一順しおりしき名かる
まりてるそてけまとりてさ
書數ものし

日に壹 清く家くもく御し
よ御ろし しん紐句補り
日乃字に いくり跡りさる事
ひ一跡ゟ あす不處をくく
跡ゟ今日昨日かえく
知まより人も日まこ句去し

いくらもあるは数日次の日
より二句きらふべし天象なれ
ばきらふ也

ひ寺 雲類にもちふるもの也
一句とのへだてもよしひ
とゝは雁しく鶉して光
ぐ御かのもとの寺の事其の
雛蛸とかはもわくおなし字
ゆへ日待の寺とかく字の日なり
もなくも字去る所なし又
天象のは嫌ひなり

ひかり家のひかり 日数の急日
は八ある也日の字ある字と去し
ゆけるの天象

日傭 ことうてま 手間とりあるなし日次
乃日とし天象ならば不嫌

人倫なり

日乃出 日光山 日乃字なれ
字は去天象よ
きらふなり

光の類ともの詞は 文字の字のやうに
光は色法は表乃事ともに
まとりし光の類とも字は数ひ
字文月日ともにかなり二句
去し他月のくら日のかくも
一字あるものは是は手燭は之表
色又日ひかりの類との詞
まつ類物の字明しくるとは
ひくときまつうちあれきさき
かくしみへ宗祇句にりまよ
そむし

光乃字　月日星に一光澄りきて花雪

にも二句乃揃し此まハ今一

くらうとも多は讀ゝく にも見え

いふ事も一も物ありゝるのひかり

ともかりへハ日乃事になるき

もも星乃内にも光像に二句

ぬ其文くかりて数もまた有

二あらもなくに見む光わ一

通う次通う萬葉集

久堅　久乃字ハ其の宇宙の

空乃事天気ふ此二句

ありて光に二の字めくへ八方

とも堅ともものゆう久字わ

まひさの字ハ久字ありわ

なれと久しまなと云詞つハ

物なも其色うさ秋まで紀ハ

久ともあも光字なし乃は

くはり始めりハ其る光文字多

速よ一座三句乃揃えし久しき

もかくし物わくハ其一句

歌との衣紙衣ょ[illegible]

揃合まくも其性の字不通

次第あしくどうしてえ

草野栄　栄乃字　写目上南日え詠潔

おかり仁德をいらの意めく

まちり源氏平氏豊潟氏大

江氏皆の祖神し

撫　撫なちり神鏡ちらる意

めもつ座よ一句不揃も

此よハ多うも久くく一句まで

日蔭乃糸 神祇に用ゆるは
云へ蜘蛛乃糸時乃祭にも
時乃所にも用ゆ 是を糸んと
いふ 冠をかくる一頭髪
くる事也ならし

紐 衣紋に用ゆるし下紐といふは
結びて身に用ゆる下締にしたる
らうしたる人はなく紐はき
ものに付て おかるもあれど
衣裳乃紐は恋しき下紐は下の
着物は肌に着る褄
紐ならしれども人によりて夜は二
く結ぶれも夜なし いふも
むすぶ所を紐として句を
下紐日本紀にて紐

婦女の心かる事にてなれも
清きさまるに紐をとくと
の白袖の内
て下紐関ぶる人ぞれ
るひきやくもわり腹
ますも緒をもゆるまるまる
給ひも縫ひまひとあたる
りまけ紫めしぬ書きくし
ゑくのひもは衣装よまくし
よおくのくれまぬ所作
着る帯は衣装よめのつき
もと衣裳乃帯に帯をとも
まれも紐数よあらぬ衣裳
紐えまらし帯を紐らの
結び方は紐へ書き入ぬ

嘴も牙乃粗なれバ何くも
くちびるの事ハさき道理を
見て常ニ相をもつて人の愚痴を論
ずる也貝乃粗ハ猪を以ていふ
婦人ハ是ノ説ニ云ありてハ下相
とす下の常とするにまされり
女ハ婦人やも下常とハいふべき
なれバむしろ常ニ論乃事なり
男時ハ下相と同じからず句
論ずるもの此又産婦が事
腹なる事ハあるべしといへり
又男の相ふさはしからずとも申し
さあうされバ又常風の
し犢鼻褌をもつて論ずるとも
く語ハなしといへる常も又
かかくも論ずるなし
産婦乃下常ハ慈なるべし
さあ論ハ又男乃下常
も七十よりの命を延るの論
なしとて語ハ事なりしく慈
よくる除をなしいはきとも
衣数のくいわらさるが為し
連くなるく離りのいふべく
もつしなる為のおれ行を論
道理をあくしてまさへ
まへし相も理わふなつき
為めハ衣数よおる次下相乃
異なる論を見るも衣数よ而
雅もとなくしるの相乃字よ
え固なと婦人し下相と云へ
為りハ判を見まへなく相と云
字ハ句禄久なくこれへし

実の名も海草に雅の縁と
なるも其乃弁に然るへし
平林乃句に　忽の雅乃句付
句を賞付之纔雅之も新式
乃詞とて平雅とハ忽乃句の如く
なるき雅乃句なれるへし
ひとつ句き　白ぬ紀より神離と
休りなる神の謂と句ぬ
まかなるし
新とひと　云る詞ハ新居と
書ゆへに人の字
なり二句を隔へし
ひとつの國　縫物とくゆへ有
人ならすなり二句去

し人偏よありてよれり
一葉ちるに　桐柳楸柏など見らるへし
初雅よまれの葉荻落
初るにたち一葉の事も葉に
ともれも初雅し
一葉の舟に　雅し桃雅とも　読あるへし　式に
云ふまでも新式の和漢の篇
に一葉の舟とい舟の字にて数
雅しとあるを見て和よ用
ゆへ一葉の舟雅とも定る桃
なるとあれば葉の舟を
同く白鷺の中より見た
漢よ雅も定まる筋ハ鵜人ある
宿も不定なき事を郷細

まつ清をたとへていへる詞也
わりしつ葉ふの船といふも一葉
乃るわ身によりていふとも
なるべからず隔の心あるべし
新式乃心をよく心得しるべし文字
かはるを嫌ひて隔とし註せる
ハ燕鶯のこと乃あらし連歌にハ
とも前に誹のハ隔り嫌へ
なくば和し漢しての差別もなく
定めしきやうなる文字のもしく
嫌ふべく嫌ふ乃字とも漢には隔に
かやうなる差ひとく和は嫌と云
詞をも隔にて同様とかく
なるべきあるべし

一夜　とこしりハ誹ニ一夜二とあり
なりともあらハ不苦候也

一村　居所の心ならべく竹乃一
村なとも又よろし　能々名
物なとへて一村と知るべきよし
句今一あるべし

一文字　連歌にハ一法にあれハ
誹諧にハ数よくかへる
もしそこに續くも七句去よ
とべし余の数字ハ連歌にハ
あれとも誹諧にハかはらでも
よそふかれくとも一座に一つ
乃物に新式に一文字との
数字との多在を定めし物
なれば細なくとかくかくまし
なれば是等文字とえらし猶く
言葉よあしく猶さらし枝
なれ不入義なれとも写す

あらまし次

ひとやこころ　ひとごころ　歌(こゝろ)多し

され共遠近(ちきえん)をわけては前句にて

二句去べし

ひとふたつ　ひとりに生類

も為とりても二句嫌ふべし　二句嫌去れ

雛(ひな)　ひいなともいふなれなども

同しく文字をあらそひ物と

えらく継には二句去べし文国

合せとひなともいふてひなの節

ひなの名ひなの人あまた所らる

ひなともいへどもあまりあまし人

形乃ひなとしても為のひな

乃ひなも連まて一句あれは二

句去べし又ひなの男といふ

いつくふみちはさえひなの

為の物の男なりいへども人形

の雛にあらくいへ共ひさ

る欲但連りひいなあれ

も継にはひなと一ひいなと

一以と二句去へし為乃ひ

なには…為乃ひなのも連

に一あれは継には二あるさ

欲也やとかくへ人形乃ひ

なあるれひなの田舎とふひな

諸国のなりいはまし出来

二句ほとあらそも六句のひな

耳にあちらくうしつ海し

つるあらしさやう此事しも

十四

まで嫌ふなれども六句を去
おなじ冬なれども紛らはし
なすはなく月に秋よりも冬も
又雲連ぶに一句の秋を嫌ふ
二句去るれども秋を清涼
を秋ふかき理にも紀の空
ものよりも冷まさる制
へだつ事にありけり

ひやゝか　初秋乃事なり
ふゆのこともし
冬の事　冷の字は

ひゆる　ひやゝかとおなじ
冬し冷の字を嫌ふなり

ひこばえ　たゞに若葉不
でも萌よりなり

ひろせたつた
広瀬龍田祭　四月四日なり
和州より有る風神の
祭を祈り給ふ神也

日より祭　四月中の申日也

ひと夜酒　夏也　醴の字
二日(?)醴も醴乃字を書
あまざけともあまざけとも
夏也六月朔より七月朔日
まで毎日あるなり
招元より(?)あり

ひを魚　冬なり　ふるくは冬也

も

藻を　此は詞連歌をさへく
二句去物式一座二
句乃袖の如くにあせり捨をき
いふ三字の有て西をさくべく
いく川も有を以垂藻をも
有べくと俳諧のへ一句下句
乃ご落の乃事ある際なり
も代を一句をりる夏也へ有せ
と落ちせ是にも遣さして入
さる縁なり

もゝ　誹諧にハ三句下
二句とも花の小物なを詞
句の内の句とし
三句ハ落乃の名るの

紅葉　也ゝ一枝桜なくに
一茸の紅葉ふ一ときと
ら乃橋ハ一以亦下敷欲連
欲よ以と三ゝ也り誹諧よハ
おうよのうら物をとくべく以と
思と紅葉の橋連歌よ三乃
氷とあれと誹諧よハ思君
同姓両句表季を捨ゆへし
紅葉よ夕乃字二句去也
おまてと松行露霜乃來ら
かなと秋ハ村らく
殊にくに夏の袖衣家
雲小紅にあり是も冬も二句去也
又紅葉ある両よ一義ふ落
葉木のてなくに婦てと
の葉ハ紅葉よ二句とし

いく條しかくもとみ紅乃字よ
も二句去し又紅葉ちり嵯
山乃名あまれるに流くなるく
連歌よ面を嫌へし誹諧よ
ハ七句去るへし紅葉乃句ある
尓折しちりそむるもみぢを
又紅葉よ二句嫌ふ名あらは
是ふ慈の名よわる神乃名
洞乃名ゐなる名酢ろ以緑
猜乃麁類乃名ゐ筆なれあかき
名ゐ筆え人倫類乃名ある
ふ井乃き書ハさくもの
神絹乃名も赤ろみのよ流
もれきるも紀の名よも文
名ゑりあれも本乃名ありよる
て名へし花の名とちらる

ゐる句ハ前句さ名ゆ不成乃
神乃名も紅海乃名にも嫌ふ
名ぬめの名もゐかきろこり
新ハ嫌紅葉あり二句去し
いう紅葉人乃ころハをきさゐ
もみへし紅葉よあかき名を
ぬさしく霧海乃おくらよ稿
や鳥をもそらハ空乃宮よ
雲和雪をも嫌へきるられ
ともゐかき名の亦空ら其
御所乃し付くもしくてよしくら
もとゐまへも名とゐりふ
心よゐもさんあまれゐかきい
あいろうくし名地不流よよ
流くく花丸名とハりふと
名をを好ふふも相な流さき

又ある時を二ツ三ツ並へし勉て
初蕃の又あまり紅粉朱丹にも
極めてしき清とも人あるこそ
ありの其鳥乃顔色あまこと
淡り白粉の丹乃顔黄合のこと
うまた庭ふ梅のきし云ふ詞も乃顔をそ
ふかすしぬとの字は嫁へ
まとも雲竹若市の顔をかくも
きこつき地句付合まとう
しろうのまうれうつてき事
連歌誹諧まかせてすする
生れし来代乃人浄瑠璃是也
うり後あさ遊しゆきすし婦ま
やあらくゆるし云句くもり
ともこま庭の宗匠波弟子
て懐さうと花とすやうら

うゐおもまへむすうなきけふの
其世人々と人為しこの式目乃
去嫁も無理と思て人々
八無理ふしくせう前座さし
説人々せうらし云理をもうて
古翁へうち次に無常まて俳連
まれなき恋へも誹ふい西全
嫁へし

和義乃精ふ　なしかしくも
秋し
和歌ふ風ちるく地を篠ふ
新式めくよ加し
和哥ふの精　為二天地の不
竹内の権摂依句
丁二句とりと新式以文をこ

そこらのかくれなきをもつてしく
きこしめし道をもきらはとくこく
たとへ物よりはるかにかはりたるかり
こころ得らるも下男か衣紅葉よ
よきよへあるやうの句のかうし
揚揚より二句こうしへといふ義也
きるにわろく句神にはか
とんかく神祇釈教恋の次旅句雑に
たとふ理もあるく雲をたとえては
うへなれより二句こうし嫌ふと云
流あるく候なり

揚句の事ハとらふハ禁と書ゆへよ
揚の字よ二句去て揚と
やふなしくてかとそしの字入
ハ揚乃字よ三句去こともの字
やの字を嫌ふ成不入しくとあ
それに句揚せもひと同じ
うつりたるし

揚うきの 懐よ出の入揚乃字
よもうきの字よし
も二句去て揚りとうきなるく
かんるきなれて二句去し

揚乃字 恋て揚乃生るつく
うく次氣ハ揚乃きの見え
揚くるハ揚よ後かき
されとも揚のなくハ物を去
候

文字の海の事 こ和敏
乃和鐵字之詩酸次九
月文字余不一露こ由見和
条め句

云挨連歌新式追加抄ニ
雨ふりの入句の文ニ文字余り
文字余りを付ハくるしからす
うたかひにあるハまゐらしと
いふ文字ニ然ニ二句去し乍
月乃文字ハ面にとあるし
あ假そてしれぬを継あきしけ
と云也ハあまたく名類あれ
や名所しかくくるしくの類さ
くるしいふへへし次連歌と
ても折越ハ嫌ひなるへく六
不若乃去三句去よく八句
すへし

鵆 秋も鵆乃字籬も折ニ連
よ鵆一すれを嫌ハ二まへ
下鵆乃字ハさても名けるか
以てる夜なり

百韻 此居ふの名所によりて
内裏乃こともし大内ハ
云二字非の庭禁中なとく
中内種乃摠名ハ折その
said
事小くも禁門乃名所女の
名ともへハ付くもしく嫌しか
雅も連よ一句乃袖ハ嫌よ二
ありくいふ古人清百韻とと
ハ嫌よも二句ハよくし嫌し
百乃字よりハ折とうふ事し
連よ百乃字ハ一唯四句嫌よ
ハ面なと人数よよみくるに
續りしよそても三ありこ韻
乃字まハ三句去と云りれも

百寮一名を百官ともいへし
それも物名をあつに因てそく
すゑへし袖物よ百寮とわら
も二まれ物すハもへつらさること
百寮ともハ百官乃方の清濁
と寮なし海へといふなるへし

求子（かくめこ）　神楽なくもの奉られ
もと神楽より神楽乃
名といふ義あれハ梁塵秘抄
の神楽の歌取て歌なとの
まうけとて源氏乃注をまうう
て実は寮乃かく義清るなし
にまとしかをいふかすしかをよ
もわけとなりつ辞と哉し
こ源ちてるなく　まへしいへし

彩式桃なりけれハ小磨霞且
漢（えん）鶴なとも今きまへしう
まるらくうら衣かうさかるる
ることるのうつ乃字ハ物よ
一源くなへしを源おしにう
ゑれわたし延ゑ乃たゑるて
うくと津ハ面たとさうふ急き
るう

藻（も）乃花　なし滄海のとた
もあくす

森（もり）　くゑ一名源よまこ桃りれ
たゝ森ともわ成ても
名前よ源氏今まうへくやよ
三くひかよ大森乃彦（ひこ）ともよ
林るとの人きれのまり参
ひと乃肉も文鯨（くら）の何くまれ

脇起も剰るとハ文字もあ
まれしてありあひよからん家
志んくおもふ詞をよしとふ
字あせ志んとか字をとも字をと
付くもく落しかられら人へ
ものままるゝ寸又其親あ
備とらふるまあり气ハ独もの
方かなるも孫とも其まハ画を
皓人とうし
二紅上河ふのあきかしもゆるを
二形ともの初るとらぬす二句
皓も
二の弟　之人独し多色て
絶る尺乃事すよ
国の付ハ追るハ二句独独り
もなりくし上を持すりハ独独
小成なりく付くいへりこれハ
文字なとあしなとゝ
とれとへりき落すハあき寸
のくゝ云ふ独詞し多いとへも
あり引の先寸恋なさる
と清く字を多かしても山類
二六の後くも
もく川　之人も九り二句も
二の嫁　人偏し桃すハ武者
武家武藏武具
武篇武略ホ乃内構なる人
今一ゝるへし
独らふよ　詞之乃字とも二句さ
かまへやのゝ面ふ

口ふるくかくし紀乃数 同前
稲のかとり ることし年ふる経の
謎字のいまくさくしぬ ならいなり
文字に 若中ある短き謎あり八
あしも若ある子に唯しくく丁
殊之歌
もゝち歌 連歌にてハ尊ぶ
よゆへり謎にくハ文字に尊ま
もふるくさ猶もいくつも云
ゐられと連歌に一ある稲ハ二つ
二ある稲ハ三つと云事にて三ある
為こさし催促とおもふよし
附ハ今一あるくの是四季文へ

百千鳥 はるくちくもれ鳥ハ古今集九三鳥
乃中にくの秘伝ある事にて
連歌の家の重ゐしきことなるを
ゝるくむ細く伝ふくきく子
乃為くいふも伝へん流るさま、
いまにたえうくさ伝ゆることの
道理ゆゑなれともこにあるさ
またこれもおなじく
もくけさ称とそのくぬるす
かくは古く習もものし
望月駒 八月十三日信濃
望月くいふ所ゟ
甲斐御馬と貢之乃今や
いくとん乃ゐを不知伝なる
人かすゑ日よ駒迎ハ記ると

なくらやうの鼻れさかなる
かく雷をもとめてさんぬ
学ぶ猿角見しまくさん人と思
なり離字あらくいはぬなる
多くの作なり

藻よ縄むし　雑しなる
まり

蝶

蝶 ちゆうち一跳よのは二つなるなり
蝶とよべる蝶といふは人称先
くはしくは蟬とかきまへし
継文字よくあまりしも蝶く
よかるへくしはかに人
乃名あるは蝶九蝶とかれは藻
蝶蛉蝶由乃名あるは蝶とされ
蝶蛸とあるの蝶蛍るも蝶
二乃円なるなり蟋蟀も蝶と
なし蝶二乃円し

蟬よ日晩　わるは蝉へと跳
ね人のまるのきやうはまるを
一宿よ二句三句のかはなるき
む捕るに跳よりも物まを去る紙
るなり

實　ゆゑくまそれたり一点文
まなをとむる闘りを
叫ぶ三つし跳び踊りへいゆかり
實東ゐと鉄ゆよ漂ひく今上
まへしもの函谷實湯
實なのともさ肉並ぶなりの
實は読むまるし関とまるり

ハ猿にあらし次居不和にあらし
も又実花とこゆうをかさハ猿も
実屋実乃ちしハ居所に二句
去べしかきはもちせく実の
実芸物をとゝもの実から物
なせて詞をせでをもしらハ居
所にあらぬ潤をせてまて取を
せて気をせて志りふこさ紙
をさめにも一座に二句も実ハ
ふとねをもいくも以二合乃内を
里乃実にハ面をせ嫁し組合え
く数ノに続句ハ二合去べし
実句のハせさるに往々くも不
嫁組るなんと夜分に續句に
ハ字を去陳ゑしも山にある実ハ
八山に嫁去浦にまで実ハ去
潟に嫁し

霊山（せんえん） 天竺乃名所にて山類に
なりけれ雑の句にも雑に
添へくるとて也ぞへてしくに山類
故居し高山の高雲なかく
あらし山類にあわまくすく云
事を定て撰びて山類ハ除く
とこゝ云へれ

（ちんえ）[illegible] 冬

せ海のをむる あれのかる詞
そ除ゆへをとつしもあさする かろし文字から
ふれを海のせるさきハ二句去之

せんとの詞に もと除との詞
二句去之もる

とくせんとくも同し

歌

輪廻（りんゑ）　秋し誹諧にハ二句を去し
去の語る詞（ことば）し
すこし隔てと　もくのまくらぬや
うるよる続きしとるまる
遠（おん）輪廻ハ多く
もくえらる　いつく句中去（さくちう）
誹諧にハ夜よを秋に一類添
と数まいのくハをわをと人
いとこてし文字笑をたくし
役者（やくしや）を言しるとしてん居
添しさとふ句もい三の内
もくし絶えも多くいはあとある
にしれも絶よのやうかきを海
し二句去とみ添しなこ
るとく夜去らぬあつさま
こ添ーなどの類添乃詞をて
あさの裏（うら）よ入をしもくし
き道（こち）猿（らく）ふ乃名なるれとも三
乃内なり　誹諧よ

落
一尾（お）花（らく）つとくるよわや流
くるみの首より一句と三
と誹諧よハ落二あり　くらと
皆しも我乃名のもてち役（よ）も
この内なる家されと人名なるれ
も類とるいらわのめくみと
いろしうめ・秋とよくるハ屋
宇野・我よ生（とい）鳥けひまなる
落しわや形家ハ作例嫁（すえ）

乃発句にもくきかく挑ゑ
也へし折し折紙し挑よのこし
居でし目の外とさ落たる
まかく云も此内挑句し落
ちるも折しるくハ名とし

梯（もとくち）
挑諧よハ一唯二句もとへし
縋乃字なりハ二句也けれ
三句湯亦山家なしかハく
はなりハ外句もとへもとこりと云
字一字おく嫌し居ではなり
二句もの

梯
草嫌さ亦の句するも打座
短るとの流しきさ居ではなれ
詞はわくハ挑よ三句もとし
亦印もとの字今へハ居亦
折二句の挑されも草ふき
梯乃句なり然ハのくも居
流なり二句もとし

縋居（すまめ）
もとも一座よ二句去也
字なりも居乃字なりも二句
流く去へし梯と縋居とも
嫌へさするく稀と此
くあり詞なれとも面をへく月
今も無外もとしとなりも
ねるともわもまる居
流りあくす

去嫌
二句去とも次
おくもよりの事し
きらすの数なら

捨乃字（すてじ）
字去ともなるに
まくるくハ嫌也

ゝ字も二句去とよきて人
棄つとらけても捨の字
は二句去るも二句去人偏し
身を捨るに世を捨る時は
捨物を嫌ふて連よれ物を嫌ふて
離りは両さうわと去るべき
なれとも身を捨るも世を
捨るも同様乃句なれとも
捨すのし物は実多くなれ故に
此外身を捨る心をとる
実をとるなるとしひ句
も述懐なりとし世を捨る
身を捨るの捨乃字は諸物
なき去へし述懐なりすべし
三句去へし

硯尸　硯乃名なれとも水
気もし硯尸の名也
は非水也
硯水　水気也りあしらひ
は硯連よ一あれとも離よ
ハ硯屏又名所の硯海なと
ぶくとこ一句去へし硯乃字
詠し様とも硯海水とへん
をさゝるる表名乃硯よ物
なきさし嫌ふし名所岩
硯海よハ面をかへと句をとる
その歌
玲瓏　山数なりあしらひ
玲瓏乃実同じ
珍露ともれも霜乃名なる
まさし山数なる硯をとの

字廉乃字ハ字書ニ出へ
多く称と称の字ハ其文字
なれとも同し西ニ婦人る
も廉乃字ハ字書る人
又女廉乃名れ称廉と名
秘乃称廉ハ本字なれ共
文字も打まてとも同し相
なれとも物を婦人なるん

炭やき 名くし炭とも計
も名くし炭竈
ハ山類し炭やきハ山類なり
あらゆる人倫し炭乃字とも
連ねて書く事要と称す
炭やきハ一季とも海炭
燧乃門なり又を出炭あると
と数よりあくへ今一ツの連一し
物をりへくるへし 観
乃まとし眉とし其まとなる
其末ニハ二句まとなるれ
も其ち句其之なと教ゆ
おもしたる句あらしも付く
もくなしくれ

巣 春し古巣もおくる
かゝるれ巣ハ夏し 雲雀
乃巣猿るの巣ハ雑し 蜂
のまと蜂乃ともも雑し巣の
字ハ蜘蛛の名をたくく
一坐ニ三句まとへし

汐干乃流枝 春し巳乃日
汐干乃名あ 深く其
さ汐干同し世八

夜し野分に不当国にも綴と
あれども今ハ雑なし
相撲(すまひ) 秋もあらり後とかの
清けいの字が後に書の
字にあらんわりなし濁へり
と内裏にて七月の下旬(げじゆん)
にすべき事なし

すゞしき すこし冬ならん
句も秋に用
夏にしかし連歌に二あれども
涼ハ冷泉(れいせん)絶ぬし穀の木にもかく
三句去べし 冷泉流冷泉
所によらずとも涼しき海 哉のしる
ふかし三句去べし 一季の冬
不相応に入れり 三の外也 水辺
ながれ

篠(まくら) 居所にて連歌に一句
連歌には若笹也 玉あれ
伊予(いよ)笹 流笹 又篠藁(さん)中
かくく数々に籠(こもり)しかし二つ
あれこのくるしみに詞ハ篠
乃類よ又句隔(へだて)く五つ
ぬこ次もの也しか篠
二句去べし

松乃葉(まつ) 居所にて拖拖になし
雑也と連歌に松去て
松乃松とあり二句去れども
連歌には松乃木とあや
松もさきさき葉なお乃門は
松をへくく二句去べし
国乃名の松原かくへ物て
あし須松竹 松松原乃松着

松楊柳松乃庭坊同前松
懐かる同前の維舟かし氣に
も松三乃門に同前松松と
つのく松ゑし やうるる木を
松ハ七句去かる松をハ一
座ふ二句乃抱く定めなり
昔云松式にも三句去る
といへとも松乃句ハ連歌乃
時原ふ松しけれハ其よ格の
の宗匠連歌にかゝれ定めなる
被も雅りしも是も分別にしく
無るべし

蓑笠

抱籠よわらす蓑
笠蓑同前連歌ハ
えすはれハ蓑一蓑笠の蓑
いふ同前なとも新式まで

養蓑蓑得蓑蓑笠なとの同
ま一はるは蓑原氏或し
蓑笠なとも或蓑大神なと
今一わたとへく出してこそ
用ゐしも亦も抱籠わあれ
又氏なとて蓑原や状りん
るとおるしこ乃同と見ても
名前なす様に抱籠のおる
もと名添氏ふおくすしなく
蓑原にとさくの八抱籠こう人
抱乃蓑一つ出しくへとの蓑
原のなりしす蓑取るもよ
おくす

末乃松山

奥羽乃名所にし
抱籠山数と末乃
松とも云く出山数し

同し松ゟ待松浦なとハ不嫌
されハとて植物とおもふへきを
されと如何若ハ松ゟ待なと
濁ハその所に松ありとしも
えすとも若くさしの乃みにて
し縁語乃雲山ま乃雲山を
松あるによりく植物と一切の
名所よは嫌なしといふて
籍なく人のものなり
杉の　山類にあらす居所
嫌ふよ二句去也
流あり野哉なとと嫌ふ野ハ山類
まてもえへしけハ其乃句を
東ともれしハ山乃をそれ
あり野ハ何かりとすへきす
野のすそとかいへるもすらく
東野と同しからむとし右
大山乃嫌ひくにあるをも
いひ又野のすそにあるとも
いへし嫌ハ二句とふともなし
理なく俳諧よるのさきさ
しあはされし句体より
て嫌ひすくし来とは
二句去し下の字より八下野と
くゆへよ三句去し嫌の八寸そ
乃外の事しもそくもけ哉
のもそもも其の数下こし
まハ二句去しすくせりとくハ
杉をさ嫌一國乃名の下
野ハもその名と同字よ成
くもくすりに素の日のことく
自くもの不苦よらすなり

下しすへしとあるハ絵図に定
まへしすへきの体よハ二句嫌ふ
し来体なりハおなし嫌ふへす
水鳥と水辺　三句去へし
例　二条きさいかかなるへし
生海のいさこ俳のまハ七句
去へし
住吉乃神　名所なし水鳥と
いひくハ名所かあもすいまと
蓑毛乃浜乃続し名所
あらさましハ名辺すしるへ
すもの新式の名所かな木
とらふ無しうさらひ嫌人
ならす
渡海乃海　あまくに気乃名
乃并なる海辺人なし名所ま
三句嫌へし水辺乃海ハなの
うミをしハ漢一もの同し排
まハ恐ろしも名所ましも皆二句
去へし
墨子の字　運字と排字ハ
二字きしまゆ
いひとくし物と嫌ふまゆもとこ
と一句へく輪韓懐古乃山るまも
今一句まへしてもそこと
時ハ皇字か物名と嫌ふ家の
山ならし教よ讀句ハもその
字なり称へくときとしぬ
なり

もじん　これをさらにもじんなりて
句ハ二字のうちの二
らもじんともじんなるくれ
上の句の上に附ともさし
るれしも三字のうちよわしすて
呂らんらんの二字のあよある
しらうく嗎へゆるし

まへ句二句を
もく病れ　きまゝ勝の字
られしく洒もとい益の字みな
まへも病く元さらもの經
合わも藝能もたれの
寒病く見し勝の字く芸
集よわも今年ハ藝能
乃まんしら附ハ聞しやう
の事るれと勝の字ハ益の

字をしようくく吟味あるへし
東海道中　さしてなまのむ
句ぶりも雜を猶ハいそら
紅葉まつり　一とせり七十文
雜し　　　　　　安よまおりし
酉酔　只一作の酔ふして今一
　　わとりへくまへへしけり
るしはうれも種をこのさ
ふをとりくもうとこゝをの
すゑし　ハ酔よきしくうれ
文字よもらぬうらすきる
乃字をよとか統もえし
うやしのとり　ハ面ふ一つ
まへをえ句る泊の助字

とうんこゝん人

万治弐己亥年
仲秋吉辰
洛陽寺町誓願寺前
安田十兵衛開板

文久二年壬戌四月
學古亭
白蟬